

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(B) (特設分野研究)

研究期間：2014～2016

課題番号：26310109

研究課題名(和文) 多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究

研究課題名(英文) International Collaborative Research Project: Ideas and Practices for Creating "Age-friendly Communities"

研究代表者

鈴木 七美 (Suzuki, Nanami)

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授

研究者番号：80298744

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,700,000円

研究成果の概要(和文)：エイジ・フレンドリー・コミュニティは、高齢社会で全ての人が心地よく年を重ねられる(エイジング・イン・プレイス)生活環境として注目され、21世紀初頭より特に都市において人々が平等に包摂的環境を享受できるようアクセシビリティやノーマライゼーションが検討されてきた。他方、社会環境設計のみならず、互助(相互扶助)や自助を支える草の根の構想やエイジ・フレンドリー・コミュニティを構成する要素や異文化交流に関する人間文化研究の深化が課題となっている。本研究では、地域の特徴を生かした共生環境と人々のエイジング・イン・プレイスを、日本、米国、スイス、韓国などの現地調査に基づく領域横断的研究によって検討した。

研究成果の概要(英文)：Since the beginning of the 21st century, various ideas have been put into practice all over the world toward creating age-friendly environments for all generations of people from diverse cultural backgrounds, and particularly for older adults. In the world's major cities, accessibility and normalization has been promoted to enable people from diverse backgrounds to equally enjoy an inclusive environment. However, it is not only necessary to design social welfare, research is needed on the local conditions and possibilities for change and on meaning-elements that guide human interaction across diverse boundaries, ages and abilities. To meet this challenge, the research explored various approaches to the development of age-friendly communities from a variety of perspectives. Findings from research drawn from communities including depopulated areas in Japan were compared with practices in U.S., Switzerland, Korea in order to reflect the diversity of solutions to aging in place.

研究分野：文化人類学

キーワード：少子高齢社会 エイジ・フレンドリー・コミュニティ エイジング・イン・プレイス 多世代共生 相互扶助 地域文化資源 CCRC(継続ケア付退職者コミュニティ) ライフロング・ラーニング

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、高齢化する 21 世紀社会の生活環境デザインとして、高齢者のウェルビーイングに配慮する環境は、全ての人々が充足して共に生きる「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」を構想することに他ならないという視点が注目され、学際的研究と公的機関、企業、市民が参加する実践が世界各地で精力的に進められている。

(2) この研究・実践に関わる課題として、以下の点が指摘できる。欧米の都市部を中心に、高齢者が地域の自宅に住み続けられることを重視して環境整備を検討してきた傾向があるが、実際には医療施設などへの移動など多様な生活環境の変動に晒される高齢者の経験に配慮すること、人々が生活する地域コミュニティ間の生活環境の平等性に配慮することをも通して、コミュニティ同士の繋がりや、より大きなコミュニティに包摂されるよう目配りすること、統計に基づく指標を充足するばかりではなく、個々人の主観的ウェルビーイングを掬いあげ、日常生活の満足度を向上する知見として共有すること、などである。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、高齢者のウェルビーイングを構成する重要な要素として注目されている「エイジング・イン・プレイス」(地域居住)について、とくに移動や変動の中で保持あるいは拡充できるという点に注目し、生活支援の必要性が多様である高齢者が、様々な選択肢の中から生活の拠点を運び必要に応じて変更できる環境整備、移動や変化の中で生きる高齢者を支え、その力を引き出すことに向けた多様な分野の人々のネットワーク形成と連携の構築について検討する。

(2) 地域コミュニティの生活環境・文化に注目し、コミュニティ同士の繋がりにも配慮した知見を提示する。各地域の生活文化における高齢期やライフコースに関する考え方、日常生活において個々人の主観的ウェルビーイング観に配慮し、相互扶助として実践されてきた工夫等の意味・意義を検討し、その知見を共有する。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、一般に「高齢者に適した場所」と見なされる場所で安住することが叶わず変動に晒される高齢者の実情を発展的に改善するにあたり、過疎地・災害地で浮上した課題や解決に向けた実践を明示し、主として北米で高齢者が心身の状況に応じて移動することが可能な施設として運営されてきた CCRC (Continuing Care Retirement Community: 継続ケア付き高齢者コミュニティ) の可能性と課題を比較検討することを通して、多世代の全ての人々が共生する新たな場

を創出する過程を具体的に提示する。

(2) 地域コミュニティの生活環境・文化に注目し、その存続とレジリエンスを支える文化的資源の継承に高齢者が果たしてきた役割、主観的ウェルビーイングに配慮した相互扶助に関し、現場実践者と医療人類学・宗教学人類学・民俗学・教育学などを専門とする研究者の領域横断型国際共同研究を遂行し、全ての人に共通の「変わりゆく人々の生」を支える多世代協働の時空間とその意義を考察し、「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」研究に新たな視座を拓く。

4. 研究成果

(1) 施設居住ではなく、地域コミュニティに住み続けるというエイジング・イン・プレイスは、北米、欧州、日本ともに重要なウェルビーイングのあり方として認識されている。とはいえ、高齢者の現実の生活は、体調にも影響され変動の中にある。本研究では、こうした高齢者の生活を調整する役割として、介護保険制度のもとで展開されている活動に注目した。本研究では、移動や変動に晒され自分が住みたい場所に長期に留まることが困難な状況におけるエイジング・イン・プレイスについて、東日本大震災被災地などに注目して検討した。

その結果、地域で高齢者ケアを行ってきた企業は、震災時とその後において、地域住民を支援し、住民、公的機関と協働して生命線を維持するなど地域コミュニティで重要な役割を果たしてきた。その際、ケア・マネージャーは、ヘルパーなどから得られる情報をも利用しつつ、高齢者住宅におけるケア、及び、最も適切な移動や介護の調整のために病院や各施設などケアに関わるエージェントとの連携に不可欠な情報を提供しネットワーク化する役割を果たしてきた。高齢者や家族をケアする対面の交流の時間は、ケア・ワーカーにとっても生活を再考する機会となっていること、しかしながら、これらの時間は、介護保険制度のもとで十分に確保することが困難であること、同様に、高齢者のケアに従事する人々のウェルビーイングや休息、学び直しの時間の不可欠性、などが明らかとなった。

特記すべき点は、東日本大震災で被災した老人保健施設に代わって創設されたアシスティッド・リビング(AL)、グループホーム、特別養護老人ホームを含む病院併設の複合施設においては、地域コミュニティで活動してきた上記企業のケア・マネージャーたちとの連携や協働が重要な役割をはたしていること、また、この施設では、津波で壊滅したコミュニティに関わる思い出の品を展示しコミュニティの文化について語るナラティブ(語り)とその時間を、高齢者たちのウェルビーイングに不可欠と考え確保していることである。すなわち、移動や変動の中で、

喪失や辛い思い出に関しても多世代が語り合い情報交換する機会を CCRC の要素を有する施設を活用し展開してきたといえる。

長年慣れ親しんだ在宅でのケアに関わる日本のケア・マネージャーの役割や、他機関との連携、とりわけ CCRC との連携に関し、現場実践者との共同研究の成果として、国際研究集会及び公開研究セミナーで報告し(

23・28)、出版物を作成している。

(2)在宅高齢者のケアの拠点として重要なのがデイサービスやデイケアなどと呼ばれる高齢者センターである。このセンターと高齢者の関わりについて、日本、スイス、ドイツ、米国、韓国における比較調査を行った。日本、スイス、ドイツの場合は、高齢者は被ケア者として、食事や健康増進プログラム等の提供を選択して受ける傾向がある。これに対して、米国では、歴史的に、センターでサービスを提供するのも高齢者ボランティアという伝統がある。センターは、プロダクティブ・エイジングやアクティブ・エイジングの舞台でもあり、高齢者たちがボランティアとして活動するアイデンティティ形成に寄与してきた側面がある。だが近年、米国でも健康増進プログラムや後期高齢者の自宅へのホームヘルプなどがプログラムに取り入れられるようになり、センターの位置づけや高齢者ボランティアの活動域が変化している(論文)。

韓国では、地域コミュニティが公的支援を受けて、若い世代がボランティアや寄付によってセンターを運営している。自宅で過ごす高齢者たちが利用できるデイサービスやデイケア、あるいは地域コミュニティにおける若い世代が参加する施設における、地域の特徴を生かした運営について、国際研究集会()で報告したうえ、出版物を作成している。

また、変化を含むセンターと高齢者の活動に関する比較調査の成果は、高齢者のエイジング・イン・プレイスを考える上で重要であり、これらの成果は、国際研究集会(、26)で報告し、論文として発表した()。

(3)ホームヘルプに関しては、スイスにおいて、自宅で療養中の人々の生活を支援する「シュピテックス」が展開され、注目されてきた。こうした自宅で過ごす人々の支援の問題は、ケア者が滞在できる時間と提供できるサービスに制限があることである。そのため、地域コミュニティにおける交流の状況が、制度がより意義のあるものとなるかどうかの影響を与える。同じ保険制度のもとでも、高齢者の満足度は、地方と都市では異なることが指摘されている。語り合いやナラティブに開かれた時間や機会に関しては、地域コミュニティの知恵とパワーに委ねられ、課題となっている状況を、国際研究集会にて報告し()、出版物を作成中である。

(4)高齢者のウェルビーイングとしてのエイジング・イン・プレイスに資する生活の場を構成する要素と実践について検討した。第一に、CCRC について、米国、カナダ、スイス、ドイツ、日本の比較調査研究を行った。CCRC は、同じコミュニティ内で、高齢期に身体的状況の変化に応じて、生活支援や医療を受けることができるので、慣れ親しんだ環境で住み続けることが可能な暮らしの場として注目されてきた。

CCRC の起源が 19 世紀に遡る米国においては、長期に暮らして資金を使い果たした人々も暮らし続けられる工夫がなされてきた。一時金を支払って入居するタイプの契約に関しては、ヤング・オールドと呼ばれるより若い世代が、生活支援を必要としないインディペンデント・リビング(IL)に入居することによって、コミュニティ内で経済的に支え合う保険の意味合いがある。さらに、多くの CCRC が、宗教や大学等に関連する NPO によって運営されていることから、多くがライフケア・コミュニティ(生涯暮らせるコミュニティ)という理念に基づいている。同じ社会福祉制度のもとでも、理念に基づき運営されることによって、高齢者のウェルビーイングにより多く応えることができる施設として展開が可能である。

また、運営方針が、住人と運営者のあいだで議論され、大学などの他の施設と連携したり、幼稚園を併設するなど、多世代対応やライフロング・ラーニングの機会に開かれたコミュニティの核としての展開が各施設で工夫されている。高齢認知症者のエイジング・イン・プレイスに向けた包摂的活動が、認知症者にとってもボランティアにとってもナラティブを活用した交流や新たなライフロング・ラーニングの機会として注目されているが、この活動拠点としても CCRC が活用されている(論文)。

これに対して、欧州や日本では、IL を併設する CCRC は未だ一般的ではないが、AL とナーシングホームなどを併設する施設は開発されつつある。欧州では、こうした施設の場合にも、20 世紀後期からは、郊外ではなく都市コミュニティに包摂される形で設置することが重視されている。これに対して、近年の日本の大都市における特徴は、高齢者の移動に伴う地域創生に資する CCRC の設立を検討してきたことにある。米国とも欧州とも異なる日本の CCRC の傾向と多世代共生コミュニティにおけるウェルビーイングについては今後も検討を続ける必要がある(発表

)

(5)各地の歴史・文化の基盤情報の共有

共同研究により、高齢者ケアの拠点が自宅、地域コミュニティ、大規模施設のいずれであっても、地域の歴史や特徴を生かし適格的なデザインがなされることが、多世代が参加す

る地域振興や文化創造に繋がる可能性が明らかとなった。共同研究を進め、第一次史料と現地調査に基づき基礎的情報を蓄積し共有した(論文、発表 21・22・24・27、図書)。

(6)エイジ・フレンドリー・コミュニティを構成する要素の意味に関する考察の深化
高齢者ケアを契機として、多世代が集う共食、異文化交流、ナラティブ、ライフロング・ラーニングと養生、レジリエンスと社会的包摂の意味に関し、先行研究と現地調査に基づき考察を深め共有した(論文、発表 25、図書 ~)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計8件)

谷口 陽子、Reconsidering of the Meaning of “Children Are Reared by Society as a Whole”: Focusing on the Practices of Two Villages in Twentieth Century Japan、国立民族学博物館研究報告、査読有、41(3)、2017、315-329

山田 千香子、日本における「近代」の源流とその萌芽、「政経論集」明治大学政治経済研究所、査読無、85(3・4)、2017、107-132

鈴木 七美、高齢認知症者のエイジング・イン・プレイスに向けた包摂的活動 アメリカ合衆国における「ブリッジ」のメモリーケアを中心に、国立民族学博物館研究報告、査読有、41(1)、2016、79-101、<http://hdl.handle.net/10502/00006115>

佐野(藤田) 眞理子、The Role of Meals for the Well-beings of Japanese and American Elderly: Cases of Meal Programs at Senior Center and Senior Day Service Center、国立民族学博物館研究報告、査読有、40(3)、2016、485-505、<http://hdl.handle.net/10502/00005974>

鈴木 七美、高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方 変わりゆく人の生(ライフスタイル)から考える、人間文化研究機構『人間文化』、査読無、22、2015、2-12、<http://www.nihu.jp/ja/publication/ningenn/22>

澤野 美智子、食の行為が生み出す関係性 フィードの人類学 の構築に向けて、神戸文化人類学研究、査読有、5巻、2015、28-41

佐野(藤田)眞理子、吉原正治、山本幹雄、高等教育における障害のある大学生の支援、CAMPUS HEALTH、査読有、52(2)、2015、15-21

鈴木 七美、未病から考える高齢社会の養生とレジリエンス、日本未病システム学会雑誌、査読無、20(2)、2014、31-35、<http://hdl.handle.net/10502/00008342>

[学会発表](計28件)

鈴木 七美、企画趣旨、国際シンポジウム「エイジフレンドリー コミュニティ 変わりゆく人生を包みこむまち」2017年2月25日、国立民族学博物館第4セミナー室(大阪府・吹田市)

Philip B. Stafford (フィリップ・B・スタッフォード)、The Missing Ingredient in the Aging-friendly Community Movement (エイジ・フレンドリー・コミュニティ運動の展開と課題)、国際シンポジウム「エイジフレンドリー コミュニティ 変わりゆく人生を包みこむまち」2017年2月25日、国立民族学博物館第4セミナー室(大阪府・吹田市)

山田 千香子、住み慣れた地域を終の棲家とするために：長崎県の小さな島の取り組みを事例として、国際シンポジウム「エイジフレンドリー コミュニティ 変わりゆく人生を包みこむまち」2017年2月25日、国立民族学博物館第4セミナー室(大阪府・吹田市)

佐野(藤田) 眞理子、老後の生きがいと安全・安心：日本版 CCRC の試みについて、国際シンポジウム「エイジフレンドリー コミュニティ 変わりゆく人生を包みこむまち」2017年2月25日、国立民族学博物館第4セミナー室(大阪府・吹田市)

鈴木 七美、Age Friendly Communities in Switzerland: Focusing on the Narrative on the Rhythm of Life and Aging-in-place (ナラティブと生のリズム：スイスの多世代対象複合型生活施設におけるエイジ・フレンドリー・コミュニティ)、国際シンポジウム「エイジフレンドリー コミュニティ 変わりゆく人生を包みこむまち」2017年2月25日、国立民族学博物館第4セミナー室(大阪府・吹田市)

澤野 美智子、Age-friendly Communities in Korea: Focusing on the Cases of Communal Dining at ' Gyeong-ro-dang ' (共食が生み出される場：韓国農村の「敬老堂」の事例から)、国際シンポジウム「エイジフレンドリー コミュニティ 変わりゆく人生を包みこむまち」2017年2月25日、国立民族学博物館第4セミナー室(大阪府・吹田市)

Philip B. Stafford (フィリップ・B・スタッフォード)、Participatory Community Planning Using the Arts and Humanities (アートと人文科学から考える参加型コミュニティ・プランニング)、国際シンポジウム「エイジフレンドリー コミュニティ 変わりゆく人生を包みこむまち」2017年2月25日、国立民族学博物館第4セミナー室(大阪府・吹田市)

Philip B. Stafford、Introductory Remarks to the Symposium、Plenary Symposium: The Age-friendly Community Movement: Inclusion, Small Change, and the Right to the City. 53rd IMCL: International Making Cities Livable Conference 2016、2016年6

月 15 日、Pontifical Urbaniana University (Rome, Italy)

鈴木 七美、Creating an Age-friendly Community in Japan: A Search for Enduring Ways to Nurture New Commons in a Depopulated Town、Plenary Symposium: The Age-friendly Community Movement: Inclusion, Small Change, and the Right to the City. 53rd IMCL: International Making Cities Livable Conference 2016、2016 年 6 月 15 日 Pontifical Urbaniana University (Rome, Italy)

鈴木 七美、Aging in Place in Japan: The Roles of Anthropologists and Caregivers Roundtable: Applied Anthropology and Aging SfAA 2016: Society for Applied Anthropology 76th Annual Meeting、2016 年 4 月 2 日、The West in Bayshore (Vancouver, Canada)

鈴木 七美、The Meaning of Collaborative Practices Conducted by Care Workers and Anthropologists after the Great East Japan Earthquake toward Aging-in-Place of Migrant Older Adults, Symposium: The Value of Applied Anthropology in Gerontology: Imaging Career Paths at the Intersection of Anthropology, Health, and Aging (SMA: Society of Medical Anthropology) SfAA 2016: Society for Applied Anthropology 76th Annual Meeting、2016 年 3 月 31 日、The West in Bayshore (Vancouver, Canada)

田仲 美智子、超高齢社会における介護支援事業の現状と課題、公開研究セミナー「高齢者たちと共に考えるウェルビーイング

宮城県の在宅高齢者生活支援の現場から」2016 年 2 月 12 日、国立民族学博物館大演習室 (大阪府・吹田市)

猪股 陽子、高齢者のウェルビーイングと生活支援事業の現状と課題、公開研究セミナー「高齢者たちと共に考えるウェルビーイング 宮城県の在宅高齢者生活支援の現場から」2016 年 2 月 12 日、国立民族学博物館大演習室 (大阪府・吹田市)

鈴木 七美、The New Role of Care Manager Toward Promoting Aging-In-Place of Elderly Experienced The Great East Japan Earthquake," 68th Annual Scientific Meeting, The Gerontological Society of America、2015 年 11 月 20 日、Walt Disney World Swan and Dolphin (Orland, U.S.A.)

鈴木 七美、医療現場での想像力 エイジング・イン・プレイスと養生、日本文化人類学会研究成果公開発表シンポジウム「人類的想像力の効用」、2015 年 11 月 8 日、金沢市しいのき迎賓館 3 階セミナールーム B (石川県・金沢市)

鈴木 七美、多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の課題

変動のなかのエイジング・イン・プレイス、日本文化人類学会第 49 回研究大会、2015 年

5 月 31 日、大阪国際交流センター (大阪府・大阪市)

鈴木 七美、Creating an Age-friendly Community in Japan: A Search for Resilient Ways to Cherish New Commons、Symposium: Culturally Competent Strategies to Assist Underserved Populations From Diverse Cultures, 2015 Aging in America Conference、2015 年 3 月 25 日、Hyatt Regency Chicago (Chicago, U.S.A.)

鈴木 七美、高齢化時代のエイジング・イン・プレイス 「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」運動と課題、第 151 回東北人類学談話会 2014 年 12 月 17 日、東北大学文学研究科棟大会議室 (宮城県・仙台市)

澤野 美智子、Health Policies about Cancer and Bio-politics, Nationalism, The Annual Conference 2014 "The Future of East Asia And Public Anthropology," East Asian Anthropological Association、2014 年 11 月 14 日、Yeungnam University (慶山市・大韓民国)

澤野 美智子、バイオメディスンと民族医学の間 韓国社会の事例に基づく医療人類学的検討、公開研究セミナー(「ケアと養生の文化」研究会 2014 年度第 1 回)「現代のヒーリング・オルタナティヴス 医療人類学の視点から」(代表:鈴木七美)、2014 年 7 月 18 日、国立民族学博物館 (大阪府・吹田市) 21 澤野 美智子、「ムビョン」、「ファッピョン」、乳がん 韓国の「オモニ」に関わる病いについての検討、第 1 回東アジア人類学研究会研究大会、2014 年 7 月 12 日、東京外国語大学 (東京都・府中市)

22 澤野 美智子、フィード(feed)の人類学の構築に向けて 乳がん患者の モギギの事例に基づく試論、日本文化人類学会第 84 回研究大会、2014 年 5 月 18 日、幕張メッセ国際会議場 (千葉県・千葉市)

23 鈴木 七美・小泉敦保、Age Friendly Community and Cultural Resources: Considering the Experience of Care Workers in a Private Sector Elderly Care Institution that Experienced the Great East Japan Earthquake、国際人類学民族科学連合 (IUAES2014) パネル 027 (NME/Commission on Aging and the Aged, Convener: Suzuki Nanami) : Considering Ideas and Practices to Create Age-friendly Communities、2014 年 5 月 16 日、幕張メッセ国際会議場 (千葉県・千葉市)

24 山田 千香子、Transforming Geographic Disadvantage: How Ojika Islanders Turn Their Hardships Around、国際人類学民族科学連合 (IUAES2014) パネル 027 (NME/Commission on Aging and the Aged, Convener: Suzuki Nanami) : Considering Ideas and Practices to Create Age-friendly Communities、2014 年 5 月 16 日、幕張メッセ国際会議場 (千葉県・千葉市)

25 藤原 久仁子、Designing a 'Coupling' Internship Program for Age-friendly Communities: In Search of New Standards for Global Leaders、国際人類学民族科学連合(IUAES2014)パネル 027 (NME/Commission on Aging and the Aged, Convener: Suzuki Nanami): Considering Ideas and Practices to Create Age-friendly Communities、2014年5月16日、幕張メッセ国際会議場(千葉県・千葉市)

26 佐野(藤田) 眞理子、The Role of Meals in Creating Age-friendly Communities for the American and Japanese Elderly、国際人類学民族科学連合(IUAES2014)パネル 027 (NME/Commission on Aging and the Aged, Convener: Suzuki Nanami): Considering Ideas and Practices to Create Age-friendly Communities、2014年5月16日、幕張メッセ国際会議場(千葉県・千葉市)

27 洪 賢秀、Preparing for a "Happy Ending": Debates on End-of-life Treatment and the Well-Dying Movement in South Korea、国際人類学民族科学連合(IUAES2014)パネル 027 (NME/Commission on Aging and the Aged, Convener: Suzuki Nanami): Considering Ideas and Practices to Create Age-friendly Communities、2014年5月16日、幕張メッセ国際会議場(千葉県・千葉市)

28 谷口 陽子、A Consideration on Various Means to Pursue Well-being of Older Adults in a Japanese Depopulated Community: A Case Study of the 2004 Earthquake Stricken Area in Niigata Prefecture's Chuetsu Region、国際人類学民族科学連合(IUAES2014)パネル 027 (NME/Commission on Aging and the Aged, Convener: Suzuki Nanami): Considering Ideas and Practices to Create Age-friendly Communities、2014年5月16日、幕張メッセ国際会議場(千葉県・千葉市)

〔図書〕(計9件)

鈴木 七美、アーミッシュたちの生き方 エイジ・フレンドリー・コミュニティの探求、国立民族学博物館、2017、260

鈴木 七美、勉強出版、子どもを産む・家族をつくる人類学 オールターナティブへの誘い、2017、309(149-174)

澤野 美智子、明石書店、乳がんと共に生きる女性と家族の医療人類学、2017、491

鈴木 七美、世界思想社、仕事的人类学、2016、318(242-245)

澤野 美智子、風響社、多配列思考の人類学、2016、388(223-244)

井藤 美由紀、ポラーノ出版、喪失とともに生きる 対話する死生学、2016、310(45-52)

山田 千香子、人間の科学新社、郷土とことわざ、2014、394(101-121)

佐野(藤田) 眞理子、東京大学出版会、公共人類学、2014、246(103-120)

佐野(藤田) 眞理子、京都大学学術出版会、知のバリアフリー:「障害」で学びを拓げる、2014、268(17-39)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/organization/staff/suzuki/index>

<http://www.minpaku.ac.jp/english/research/activity/organization/staff/suzuki/index>

<http://www.nihu.jp/ja/publication/ningenn/22>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 七美 (SUZUKI, Nanami)

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授

研究者番号: 80298744

(2) 研究分担者

山田 千香子 (YAMADA, Chikako)

聖徳大学・心理・福祉学部・教授

研究者番号: 30311252

(3) 連携研究者

藤原 久仁子 (FUJIWARA, Kuniko)

大阪大学・大学院言語文化研究科・特任助教

研究者番号: 00464199

洪 賢秀 (HON, Hyunsoo)

東京大学・医科学研究所・特任助教

研究者番号: 70313400

白水 浩信 (SHIROUZU, Hironobu)

北海道大学・教育学部・准教授

研究者番号: 90322198

(4) 研究協力者

猪股 陽子 (INOMATA, Yoko)

井藤 美由紀 (ITO, Miyuki)

小泉 敦保 (KOIZUMI, Nobuyasu)

佐野(藤田) 眞理子 (SANO-FUJITA, Mariko)

澤野 美智子 (SAWANO, Michiko)

Philip B. Stafford (STAFFORD, Philip B.)

田仲 美智子 (TANAKA, Michiko)

谷口 陽子 (TANIGUCHI, Yoko)